

基本展示室「ネプキ 私たちのしごと」における 職業紹介展示について：開館までの経緯

Report of the Exhibition of Ainu Occupations in the Permanent Exhibition Room:
“nepki - Our Work” up to the 2020

田村将人 (TAMURA Masato)

資料情報室長 (Head, Division of Collection Management, National Ainu Museum)

立石信一 (TATEISHI Shinichi)

学芸主査 (Senior Fellow, National Ainu Museum)

関口由彦 (SEKIGUCHI Yoshihiko, Dr)

研究主査 (Senior Fellow, National Ainu Museum)

是澤櫻子 (KORESAWA Sakurako)

アソシエイトフェロー (Associate Fellow, National Ainu Museum)

1. はじめに

本稿は、アヌココロ アイヌ イコロマケシル (国立アイヌ民族博物館 (以下、当館)) の基本展示室における「ネプキ 私たちのしごと」のうち、「2. 激動の時代のなかで」「3. 現代のしごと」(以下、職業紹介展示とする) の開館時の展示内容と展示方針や意図、及び制作過程について報告するものである。

本稿で報告する職業紹介展示は、個々人が携わってきた仕事をテーマに、解説パネルや映像、思い入れのある仕事道具や作品を通してアイヌ民族のしごとの多様性や現代のくらしの一端を伝えることを目的の一つにしている。本展示の内容と方針、制作過程を報告することは、博物館展示において先住民族の現在を伝える展示が如何なる考え・実践で行われているのかについて、当館としての事例を提示できるという点で意義があると考えられる。以下では、開館時の展示内容(執筆：是澤)、方針・意図(執筆：田村)、制作過程(執筆：関口、立石)について報告する。

2. 職業紹介展示の内容

当館の基本展示は6つのテーマと探究展示 テンパテンパから成っている。テーマの1つである「ネプキ 私たちのしごと」は、基本展示室の入口からみて奥のコーナーに位置し(図1)、3つの中テーマに分かれている(表1)。

中テーマ1「シンリッ モニキ 先祖のしごと」は、先祖のしごとを紹介することを目的に、狩猟、漁撈、農耕、採集などで使用された道具類や道具にみられる生活の知恵などを展示している。

中テーマ2「ユッケ レーラ トウンケ タ 激動の時代のなかで」は、19世紀後半以降、同化政策や法律によりアイヌ民族の住む場所や仕事が変わっていく時代を「激動の時代」と称し、漁業、農業、林業など、さまざまな職業に就いた個々人がその時代をどのように生きてきたかを紹介している。

中テーマ3「タネ オカイ モンライケ 現代のしごと」は、国内外で活躍する個々人に焦点をあて、仕事道具や作品の展示を通して、アイヌの現在を紹介し

ている。

このように、「ネプキ 私たちのしごと」はアイヌ民族が携わってきたしごとの紹介を通して、時代の変

化に応じて柔軟に展開していく生活の様子や現在のくらしの一端を伝えている。以下では、中テーマ2と3に焦点をあて、本展示の内容についてまとめる。

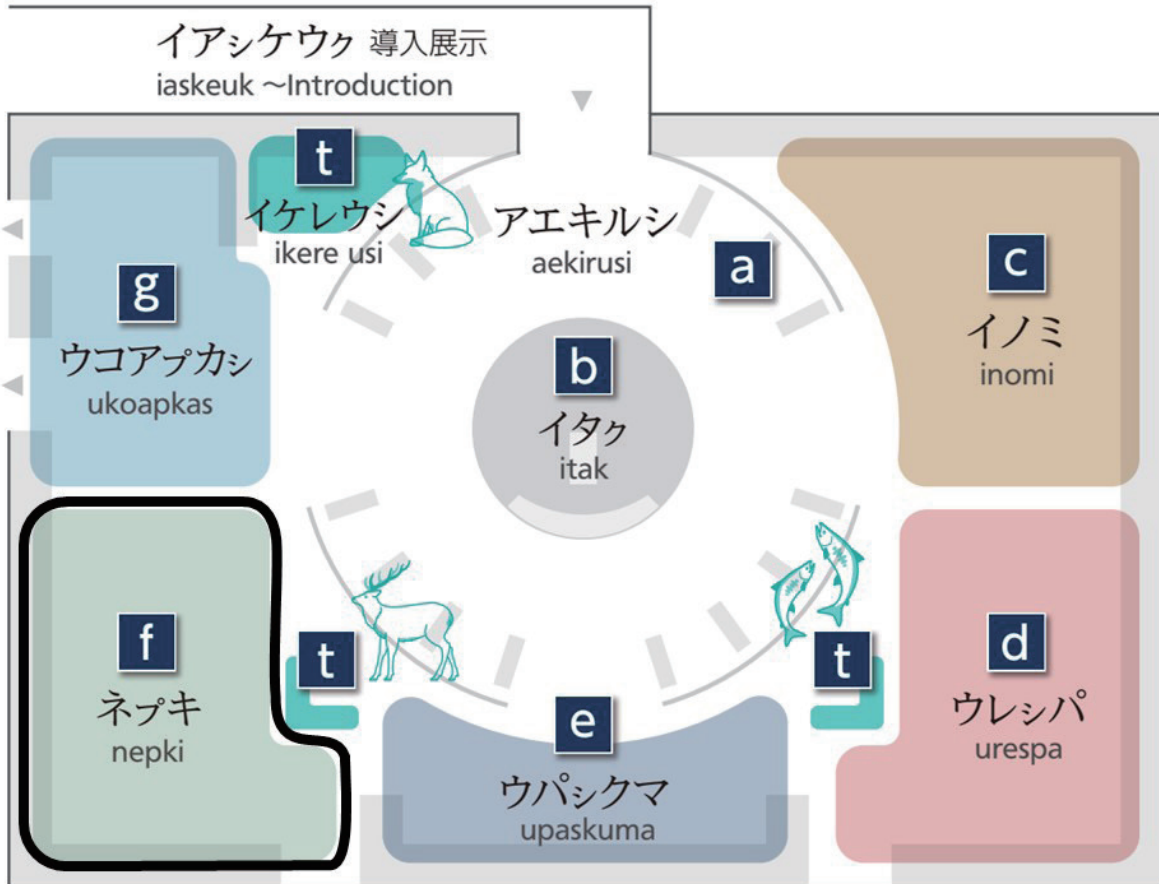


図1 「ネプキ 私たちのしごと」の基本展示室の位置

表1 「ネプキ 私たちのしごと」の中テーマ一覧

	アイヌ語タイトル	日本語タイトル	解説文の方言
1	シンリッ モニキ sinrit moniki	先祖のしごと	白糠方言
2	ユフケ レーラ トウンケ タ yuhke reera tunke ta	激動の時代のなかで	樺太方言
3	タネ オカイ モンライケ tane okay monrayke	現代のしごと	十勝方言

中テーマ2、3は9名の職業紹介展示と3つの職業カテゴリーの展示で構成されている(図2)。後者の3つの職業カテゴリーの展示が工芸品制作や音楽活動のようなアイヌ文化に関する活動を生活の基盤としている工芸家やアーティストについての展示であるのに対し、前者の9名の展示は、現代の職業の多様性を紹介することをテーマにしている。便宜的に「伝統文化

以外のしごと」と言えるが、4.1で述べるように、伝統文化と直接的な関係がないと思われる職に就いていても、各々が自らのしごとのなかにアイヌ文化の要素を見出し、意味付けをしている場合もある。どちらの展示も、日々の暮らしの中で再定義され、展開されていくアイヌ文化の広がりを示し、各々の職業や生き方の多様性を示す内容となっている。

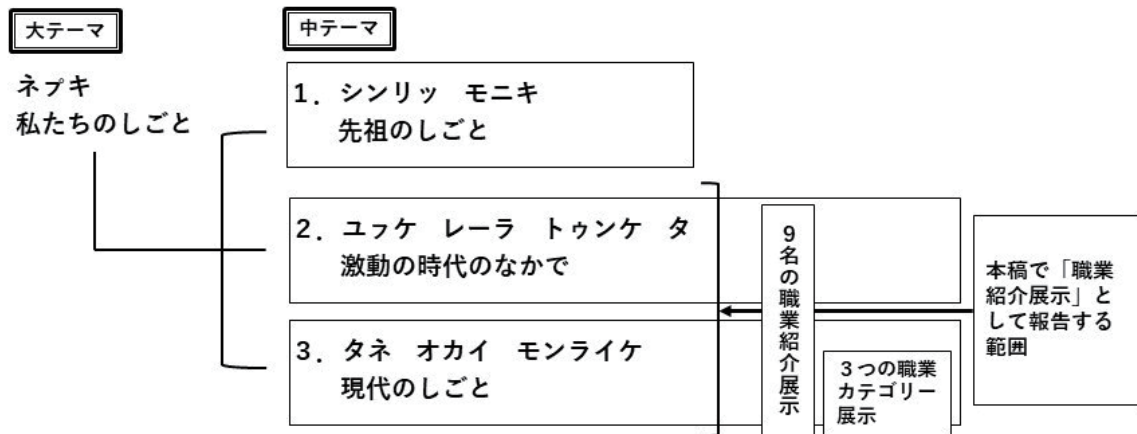


図2 「ネプキ 私たちのしごと」の構成および本報告の範囲

2.1：9名の職業紹介展示

9名の職業紹介展示は、人物の等身大のシルエットを模したグラフィック、文字、写真、仕事道具、短編映像で構成されている。等身大パネルの表面は、人物のシルエットと職業名を大きく記し、一目でさまざまな職業があることを視覚的に示している（写真1）。裏面では、各人物の仕事道具が展示されるとともに、名前、生年、出生地、居住地などの基本情報に加え、職業に対する考え方やアイヌ文化に対する思いが日本語と英語で記され、写真や映像とともに紹介されている（写真2）。

2020年の開館時に紹介したのは、9名（男性6名、女性3名）であった（表2）¹。1945年以前に生を受

けた人物は「2. 激動の時代のなかで」、1945年以降に生まれた人物は「3. 現代のしごと」に分類される。漁師、測量技師、農家、林業従事者、俳優、フェアトレード、アイヌ料理人、家具製作、サラリーマンとして働く／働いていた方々である。職業名については、本人や遺族などに希望を確認してつけている。また、本展示は撮影禁止とした箇所もある。パネルの詳細な内容については4.1を参照されたい。

注

1 2023年3月に展示替えを行い、2024年2月時点では男性5名、女性4名となっている。



写真1 等身大パネルによる9名の職業紹介展示



写真2 等身大パネルの内容

表2 9名の職業紹介展示の内容一覧(2020年開館時)

	職業名	内容	性別	地域	中テーマ
1	漁師	1868年生 展示資料：三石昆布	男性	北海道新ひだか町生	2. 激動の時代のなかで
2	測量技師	1893年生 展示資料：測量器具	男性	北海道旭川市生	2. 激動の時代のなかで
3	農家	1921年生 展示資料：鉞	女性	北海道帯広市生	2. 激動の時代のなかで
4	林業従事者	1934年生 展示資料：とび	男性	北海道平取町生	2. 激動の時代のなかで
5	俳優	1962年生 展示資料：台本	男性	東京都生	3. 現代のしごと
6	フェアトレード	1967年生 展示資料：コーヒー豆 (ピーベリー)	女性	北海道芦別市生 マレーシア在住	3. 現代のしごと
7	アイヌ料理人	1968年生 展示資料：調理器具	男性	北海道枝幸町生	3. 現代のしごと
8	家具製作	1983年生 展示資料：家具模型	女性	北海道帯広市生 神奈川県相模原市在住	3. 現代のしごと
9	サラリーマン	1992年生 展示資料：事務用品	男性	北海道白老町生	3. 現代のしごと

2.2：3つの職業カテゴリーの展示

3つの職業カテゴリーの展示では、「工芸品」「伝統文化を活かし、広げる」「音楽」のカテゴリーを設定し、それらの活動を基盤に仕事をしている個人と作品を紹介している。

「工芸品」は、時代や文化伝承の環境が変化しつつも、現代まで継承される伝統的な技術にもとづいてつくられた作品と工芸家の紹介を目的としている。

「伝統文化を活かし、広げる」では、伝統的な技術を受け継ぎながらも、技法や素材をアレンジした作品を制作する人たちや歴史性・アイデンティティを背景に独創性の高い作品を制作する工芸家やアーティストの

作品を展示している。

「音楽」は伝統的な音楽をベースにしつつも、現代の音楽シーンのなかで活躍しているアーティストを紹介している。

本展示は、それぞれの作品や仕事道具をケース展示、あるいは露出展示にし、壁面に個人の経歴と顔写真、作品制作の様子や演奏の様子、展示風景を伝えるグラフィックパネルで構成されている(写真3)。2020年の開館時に紹介したのは、5名(男性4名、女性1名)である(表3)。各カテゴリーの展示資料の詳細については、4.2を参照されたい。



写真3 3つの職業カテゴリーの展示

表3 3つの職業カテゴリーの展示内容一覧（2020年開館時）

	カテゴリ	内容	性別	肩書
1	工芸品	貝澤守 展示資料：二風谷イタ	男性	アイヌ工芸家
2	工芸品	藤谷るみ子 展示資料：二風谷アットウシ	女性	アイヌ工芸家
3	伝統文化を活かし、 広げる	藤戸竹喜 展示資料：「熊面」	男性	木彫り職人
4	伝統文化を活かし、 広げる	藤戸康平 展示資料：「コンパス」「腕時計」	男性	木彫り作家・ プロダクトデザイナー
5	音楽	オキ 展示資料：「トンコリ」	男性	アーティスト

以上、「ネプキ 私たちのしごと」のうち中テーマ2、3について開館時の展示内容、展示手法を中心に概要をまとめた。本報告4で後述するように、本展示では、展示に協力していただいた方々が仕事道具や作品に対してどのような思いを抱き、意味付けをしてきたのかを言語化する過程が重要になる。インタビューなどの手法を通して、それら博物館資料になりづらい出来事や技術（「コト」）を文字、写真、映像、イラストなどの手法を用いて展示資料にしたことが本展示の特徴と言えるだろう。その方針と制作過程について、続く3、4で報告する。

（執筆：是澤）

3. 職業紹介展示の方針・意図

2015年、文化庁は、国立のアイヌ文化博物館（仮称）展示検討委員会とワーキング会議を設置し、当時、外部の研究者として筆者（田村）も委員に加わって議論を開始した。筆者は2016年2月から、内部の職員としてこの委員会を運営する立場に変わったが、ここではこの展示検討委員会とワーキング会議での議論をふりかえることとする。なお、2016年5月には国立アイヌ民族博物館という名称が確定し、委員会の名称も変更になった。

この展示検討委員会は、旧一般財団法人アイヌ民族博物館の館長や、アイヌ語やアイヌ文化の研究者を含め7人。下部組織と位置付けられていたワーキング会議は、工芸家、大学教員、学芸員など、アイヌ語・アイヌ文化・アイヌ史の研究・実践を行っている人たちを中心に14人（延べ）であった。言うまでもないことだが、それぞれの委員会はアイヌ民族と和人（日本のエスニック・マジョリティ）から構成されていた。

これらの会議では、常設の基本展示室においてアイヌ民族と同化政策の歴史を伝えること、その上で現代のアイヌ民族の多様な姿を伝えること、そもそもアイヌ民族をよく知らない（初めて知る）来館者を対象とすることなど、常設展示を構成する前提を確認しながら議論が重ねられてきた。

また、会議の場では、旧一般財団法人アイヌ民族博物館や釧路市の阿寒湖アイヌコタンなどで、多くの観光客が、「いつも茅葺の家に住んでいるのか？」「このあと、山に帰るのか？」「熊などを狩猟しているのか？」はては「日本語が上手だね」と職員に投げかけている現実が共有された。それは、目の前で伝統的な民族衣装をまとって、踊る姿が披露され、工芸制作のシーンが目に入ってくるので、やむをえないところもある。しかし、来館者による、そのようなアイヌ民族に関するステレオタイプを壊すことも、展示を構成する上では必須条件であることが議論の中で確認されたのであった。

同時に、基本展示の中では、アイヌ民族のうち、伝統文化や工芸に従事している人はほんの一部であり、さらに国外で活躍しているアイヌ民族の職業を紹介することも目標とされた。アイヌ民族一般の歴史や文化を紹介するだけでなく、個人に焦点をあてて等身大のアイヌ民族を知ってもらうことが重要だという議論もあった（すでに大阪人権博物館や北海道博物館で前例があった）。この結果、「私たちの歴史」と「私たちのしごと」の展示において、これらの会議で議論された内容を実現することが目指された。

具体的に「私たちのしごと」の展示に関する議論を紹介しよう。19世紀半ばの明治以降、各地のアイヌ民族が具体的にどのような職業についたのかを示すことが、来館者にはわかりやすいだろうということが展示検討委員会ワーキング会議でも議論された。それ

が、「私たちのしごと」の中テーマ「2. 激動の時代のなかで」と「3. 現代のしごと」である。

この展示の大きな目的は、先に述べた旧一般財団法人アイヌ民族博物館や阿寒湖アイヌコタンなどで見られたような誤解を解くためである。歴史上はそのような生活が、明治以降の同化政策等により不可能となったことはすでに述べたとおりである。このような誤解を解くために、伝統文化等にかかわることはあっても、伝承以外の職業を優先して選定することになった。また、展示手法については大阪の国立民族学博物館のアフリカ展示の手法を参考にした。最終的に展示として紹介することになった職業については、本報告2の表2、3を参照されたい。

表2、3についていくつかのポイントを整理しておこう。(1)「俳優」など職業の名称を前面に出すことで、明治以降のアイヌ民族が多様な職業についてきたことを示した。(2)その職業についているアイヌ民族の各個人のプロフィールを簡潔に紹介して、その職業とのかかわりを知ってもらう。(3)アイヌ民族が今や北海道にだけでなく、北海道外、国外に住んでいることも知ってもらう。(4)その職業に関連する仕事の道具を展示し、さらに3人に限っては本人が出演する短い動画をループ再生している。

物故者、健在者を含め、地域や性差のバランスを考えながら、展示に協力してもらえるかどうか交渉しつつ、開館時の14人の職業が決まったというところである。同時に、これらの職業についても展示の入れ替えを行うことも会議の場で確認された。また、展示するために本人や遺族から借用した職業に関する道具について、可能であれば博物館としてアーカイブしていくことも提案された。

(執筆：田村)

4. 職業紹介展示の制作過程

4.1：9名の職業紹介展示の制作過程について

9名の職業紹介展示は、人物の等身大のシルエットが遠くからでも人目をひき、各職業を象徴する道具とその背後にある物語が写真・映像と共に紹介されている。その顔の見える個人の物語は、「伝統的な生活」を送っていた時代にはなかった様々な職に就き、複雑な民族意識と共に多様な生き方をしてきた人たちがいることをリアルに示してくれるにちがいない。本節では9名の職業紹介展示の展示制作の工程を具体例に即

して見ていくことにしたい。

「家具製作」というしごと就いている館下直子氏には、長年にわたって親交の深い博物館設立準備室職員(内田祐一氏)を通して、展示協力の内諾を得た。直接対面するインタビューを行ったのは1回のみであったが、当該職員とすでに長年にわたる関係性が築かれていたことがインタビュー調査のベースになっていたと言えるだろう。展示協力の内諾を得た後、事前調査として館下直子氏が夫婦で営む家具工房のウェブサイトを開覧し、家具づくりに対する考え方や、館下直子氏のプロフィールなどを確認した。そのうえで、2019年8月23日に、内田氏と筆者(関口)の二人で神奈川県相模原市の工房および自宅にお伺いした。

ここでは、まず、展示の趣旨説明を行った。本展示を通して、現在、アイヌは昔のままの生活を送っているわけではなく、「伝統的な生活」を送っていた時代にはなかった様々な「しごと」を行い、時代に合わせて様々な生活を営んでいることを伝え、さらに、アイヌ民族であるという意識の在り方も多様であることをも伝えていくといった、展示の目的を説明した。また、展示においては、特にモノに焦点を当てて、モノから人間が浮かび上がるようなやり方をしたい旨についても伝え、参考資料として展示室の図面や、しごと展示の完成予想図を見もらった。

そして、あらためて協力の了承を得たうえで、インタビューを行った。インタビューは工房の事務所部分で行い、その場には、館下直子氏夫妻と、内田氏、筆者(関口)がいた。主に筆者が質問し、館下直子氏から回答を得た。インタビューの詳細については省くが、概ね、仕事について、家具工房(nikom)について、模型(スケールモデル)について、メッセージについて、アイヌ文化活動について質問し、最後に職業名(「家具製作」)の確認をした。このインタビューに基づく展示グラフィックの内容については、後述する。

インタビューの終了後、シルエット撮影をさせてもらった。撮影は、他の人物の展示制作に用いたものと同じカメラで、同じ高さで行うことになっていた。高さは床面から1,100mmに統一し、高さを一定にするために三脚を用いた。被写体とカメラの距離は3,000mmとした。人物は画面の中央になるようにし、上下左右に余裕があるようにした。また、シルエットをとらえやすいように無背景とした。館下直子氏には、製作した椅子をもってもらい、それが画面中

央にくるようにした。さらに、正面以外にも横や斜めなどの角度からも撮影した。シルエット撮影の後に、しごと風景の撮影もさせてもらった。館下直子氏が作業をしている様子や、さまざまな大型工作機械のそばに立っている夫妻を撮影した。一通り撮影した後で、「画像素材利用許諾書」に署名してもらった。

しごと道具として、模型（スケールモデル）をお借りすることにし、サイズの計測をおこない、後日郵送してもらおうこととした。

このインタビュー内容にもとづいて、筆者がグラフィック原稿の執筆を行った。執筆にあたっては、「小見出し+写真+説明」を1セットとし、1セットごとに完結する内容とすることになった。それを数セット作成することで、1人物あたりのグラフィックが完成する。シルエットの描き方については、顔をしっかりとリアルに描く案もあったが、輪郭と鼻までを描くこととした。筆者が執筆した原稿については、電話やEメールで館下直子氏に確認してもらい、加筆・修正等を行った。

以下に、完成したグラフィック原稿の概略を記す。家具作りを行なっている館下直子氏は、1983年、北海道帯広市生まれで（神奈川県相模原市在住）、2002年から帯広高等技術専門学院で木工技術を学び、2014年に、家具職人の夫と共に家具工房 *nikom* をはじめた。木の温もりを感じられる家具、オーダーメイドならではの、使う人の暮らしに寄り添った家具を製作している。“*nikom*”とは、“木の芽”を意味するアイヌ語である。彼女たちの届ける家具から新たな葉や花が開き、良い出会いがありますように……という思いが込められている。

nikom では、家具のオーダーを受けると、まず1/5「スケールモデル」（模型）を製作する。そして、それを見ながらお客さんとじっくりと話し合い、お互いのイメージを形にしていく。それはあたかも、対話の中から“木の芽”を育てていくかのようなものである。そこには、“木の芽”が末永く育っていくことを願う気持ちが込められているという。この模型がしごと道具として展示されている。また、“*nikom*”というアイヌ語を工房名に使うことについては、小学3年生より帯広のカムイトウウポポ保存会で踊りを習ってきた館下直子氏が、神奈川に引っ越してきたときに、首都圏ではアイヌ民族を知らない人たちがたくさんいることに気づき、“*nikom*”という言葉がアイヌのことを知るきっかけの一つになってほしいと望んだことも深く

関わっているとのことであった。ここでは、“*nikom*”というアイヌ語が彼女の日々の生活の文脈の中におかれることで、新たな意味づけを生じさせていると言えるであろう。アイヌ文化は、決して博物館で展示されているだけのものではなく、今を生きる人々の日常生活の文脈の中で、生き生きと発展しているのである。

以上が、館下直子氏についてのグラフィック原稿の概略であるが、その執筆の直前に、この展示を「モノ中心」とするのか、「人物紹介」を中心とするのかといった議論が準備室であった。このことは、従来の民具の展示が、名もなき個人が作り、使ったモノの匿名性、一般性を前提にしていたのに対し、現代のアイヌのしごと道具の展示が個人名を出すようになったことをめぐる議論であった。換言すれば、モノに焦点を当てて匿名性を重視するのか、ヒトに焦点を当てて個人名を出すのか、といった問題である。もっと平たく言えば、モノを主にするのかヒトを主にするのかということである。筆者個人の意見としては、モノが主になるのでも、ヒトが主になるのでもなく、モノとヒトとの不即不離のつながりを示すことが重要だと考えている。たとえば、家具工房 *nikom* で作られるスケールモデルは、人間が作った道具であることに違いはないが、同時に、その道具が家具製作者と注文者の相互理解を形成し、新たな人間関係を生み出していくものでもあった。つまり、モノとヒトのいずれが主であるかを決め切れないのである。このようなモノとヒトとの関係を示していくことも、本展示に秘められた可能性であるといえる。

本節では9名の職業紹介展示の展示制作の工程の一例を示したにすぎないが、本節の記述をもとに展示の見直しを行うことで今後の展示替え等の展望が得られれば、その目的を達したといえよう。

（執筆：関口）

4.2：3つの職業カテゴリー展示の制作過程について

当コーナーでは、当初「伝統的工芸品とは」「伝統文化を活かし、広げる」「アイヌ・ミュージック」の三つのテーマを掲げた展示となっていた。中テーマの区分としては「3. 現代のしごと」であるが、当コーナーとともに、「2. 激動の時代のなかで」と「3. 現代のしごと」の一部が別の展示としてあり（2-1を参照）、そこではいわゆる伝統的なアイヌ文化に直接的には関係しないしごとをしている方々を紹介することとされていた。したがって、当コーナーでは、伝

統的なものも含めてアイヌ文化に基づいたしごとをしている方々の作品をギャラリー的に紹介することとされていたのである。

一点目は「伝統的工芸品」の紹介である。ここでは伝統的な工芸技術が変化しつつも、現代の枠組みのなかで継承されていることを紹介することとされた。とくに、2013年に経済産業大臣が「伝統的工芸品」に指定した二風谷アットゥシと二風谷イタである。伝統的工芸品の指定要件には「一定の地域において少なくとも数の者がその製造を行い、又はその製造に従事している」などがあり、現に二風谷では今でも産業として成立していることから、代表的な「しごと」として紹介すべきものとされたのである。ただし、将来的には二風谷の工芸品以外も紹介することが予想されたため、テーマは「工芸品」とすることとした。また、ここでは他の2つのコーナーに比べて、伝統的な技術に基づいた物作りをしている人やしごとが対象となる。

二点目の「伝統文化を活かし、広げる」については、当初はいわゆる「アイヌアート」と呼ばれる作品のことを指しており、若手作家を中心とした最新作をギャラリー的に展示することとなっていた。しかし、開館の準備段階においては、アイヌアートという言葉の定義が十分ではなく、そのためどのような作品が該当するのか、あるいはしないのかが明確ではないとされたため、直接的にはこの言葉に言及せずに、アイヌ文化を引き継ぎ、発展的に展開させている工芸家やアーティストを紹介することとなった。また、個々の作家の作品だけを紹介するのではなく、将来的にはアートやクラフトのプロジェクトを紹介することも検討された。そこでは伝統技術がある、あるいはアイヌ文化に着想を得て作品を制作している人やモノ、あるいはコトが対象となる。

三点目の「アイヌ・ミュージック」では、アイヌ民族の伝統音楽をベースにしながらも、現代の音楽シーンのなかで活躍しているアーティストを紹介することとした。また、「アイヌ・ミュージック」という言葉の定義がなされていないことや、必ずしもいわゆる民族音楽だけを紹介することが目的ではないため、テーマは「音楽」として、アイヌ民族としてのアイデンティティをもち、音楽活動を行っているアーティストを広く対象とすることとした。展示を制作する過程で、音楽のコーナーについては展示資料の性質上、露出展示するとともに、紹介するアーティストのグラフィックを大きく展示することとなった。したがっ

て、他のコーナーと比べたときに、音楽のコーナーだけが目立ってしまう恐れがあったが、展示のバランスだけを考慮するのではなく、目立つものがあっても良いのではないかという議論がなされた。また、展示室の特性上、「音楽」のコーナーでありつつも、展示室の構造的に楽曲を聞かせることができないとされたため、そのままでは展示が埋没してしまう恐れがあったことから、グラフィックなどの展示を強調することとしたのである。

以上の検討過程とその後の展示制作を経て、開館時には「工芸品」として貝澤守氏の二風谷イタと、藤谷るみ子氏の二風谷アットゥシ、「伝統文化を活かし、広げる」では藤戸竹喜氏の熊面と、藤戸康平氏のコンパスと腕時計、「音楽」ではオキ氏のトンコリを中心としたステージをイメージした構成の展示を行った。

今回は、展示の構成についての検討過程を報告した。実際の展示に至るまでには、各作家との打ち合わせと、協働して展示を作り上げた行程などがあったが、このことについては別稿で改めて報告したい。

(執筆：立石)

5. おわりに

生きることと直結した営みであるしごと／職業は、社会環境や自然環境の変化を通して多様な形をとってきた。世代や性別、出身地や居住地の異なる個々人の職業に焦点を当てた当館の職業紹介展示は、アイヌ民族の現代の生活や民族意識が、ステレオタイプ的に想像される「伝統的」な枠組みだけでは捉えきれない展開をしていることを示している。

本報告3章では、こうした当館の職業紹介展示の構想が、展示検討委員会やワーキング会議のメンバーの経験に基づき、現在のアイヌ民族の多様な姿を伝える必要性を訴える声から生じたものであったことが示された。また、展示制作について、4.1ではインタビュー調査の詳細な一事例が報告されると共に、モノ展示とヒト展示の相関関係に関する考察も述べられた。4.2では、各職業カテゴリーの選定経緯や名称変更の理由がまとめられた。これらの議論・実践を経て、2章で紹介したような現在の職業紹介展示が出来上がったのである。今後、本展示は展示替えを予定しており、より多くの方々の職業を紹介する計画である。

開館以降、本展示については様々な意見や反応が寄

せられている。国立アイヌ民族博物館のウェブサイトでは、2020年10月12日に「よくある質問」を公開し、本展示を含む基本展示の意図について「Q3. どうして展示資料は「古い」資料ばかりではないのでしょうか？」で簡単な説明をしている。アイヌ民族をはじめ、先住民族の現在を展示で伝える手法については多くの議論がある。こうした議論は、伝統的な生活とは何か、伝統的な枠組みにおさまらない現代の生活におけるアイヌ文化をどのように捉えるのかといった問いと合わせて議論される必要がある。本報告が、それらの議論に関する一事例として広く参照されることを期待したい。なお、職業紹介展示に関する既出文献を下記にまとめた。併せて参照されたい。

参考文献

- 国立アイヌ民族博物館、立石信一、佐々木史郎、田村将人（編）
2023 『ウアイヌコロ コタン アカラ ウポボイのことばと歴史』国書刊行会
関口由彦
2022 「家具製作（現代のしごと）」、国立アイヌ民族博物館編『ANUANU』(9)：5。
立石信一
2020 「国立アイヌ民族博物館 2020 ——開館を目前に控えて」
https://artscape.jp/report/curator/10161225_1634.html (2023年4月28日閲覧)
2022 「トンコリ」、国立アイヌ民族博物館編『ANUANU』(8)：5。
田村将人
2020 「国立アイヌ民族博物館の基本展示で伝えたいこと」
https://artscape.jp/report/curator/10165945_1634.html (2023年4月28日閲覧)